

水泳能力と水辺遊びに関する一考察

—兵庫教育大学学部生の事例から—

永木耕介* 寺岡敏郎* 高田俊也** 本多靖浩** 森田啓之** 山本忠志** 松下健二** 千駄忠至**

1. 緒言

水泳技術の習得は何故必要なのであろうか。クジラやイルカなどを引き合いに出すまでもなく、泳ぐという行動自体は動物段階でも盛んに行われるものである。水浴び程度であれば、暑さを凌ぐためあるいは体を洗うためということになるだろうが、水中を自由に泳ぎ回る技術は、やはり川や海に住み水中の獲物を捕る種に必要なものと見て良いであろう。スポーツ史やスポーツ人類学領域の知見を眺めても、ヒトの泳ぎの技術は主に漁労によって生計を立てる種族において発達してきたものと見られる。しかしたとえ水辺で漁労を営む種族であっても、一日中労働していたわけではなく、そこには水と戯れるという「遊び」があったに違いない。伝統的社会においては、労働と遊びが今日ほど分離した状態ではなく、ポリネシアから世界中へ伝播した波乗り(Surfing)にその一例を見るがごとく、ヒトもまた他の動物と同じように水(Aqua)という自然を利用して遊ぶことに熱心であった。

つまり、水泳技術習得の目的は、非日常的空間である水中において身体を守り活きるためという必要に迫られた面と、自由自在に遊泳したいという根源的な欲求を満たすための両側面から捉えることができる。

高度に文明化された現代社会において、かつてのように漁労のために水泳技術を必要とするケースはほとんど消失した。しかし、文明化の反動としての自然回帰志向によって、いわゆる水辺スポーツが隆盛を極める傾向にあり、その実施による水難事故が後を絶たない。ちなみに、余暇開発センターのレジャー白書によると¹⁾、日本でのサーフィン・ウインドサーフィン・ヨット・モーターボート・ダイビング・釣りなどの水辺スポーツへの年間参加人口は延べ2,000万人を超えており、いかに水辺スポーツが大衆化した時代であるかを示している。

あらためて言うまでもないが、ヒトは基本的に学習しなければ泳げない。日本における「体育」としての水泳は、すでに江戸時代において武士訓練の内容として存在していたが、本格的に重要な教科目として位置づけられるのは、やはり近代国家的な学校体育がスタートする明

治期以降においてである。明治期から戦前にかけて体育界に多大なる貢献をなした嘉納治五郎も、「先づ遊泳を奨励せよ」として、「遊泳は、体育とし、娯楽とし、精神修養の一法とし、又海国民に必要な水と親しみ、水を恐れぬ気風を養う上に最も適当なる手段である」²⁾ことを強調している。

そして、戦後、文部省通達およびスポーツ振興法(昭和36年)によって、特に昭和40年代以降全国的に学校プールが設置されるのに比例して、児童の泳力が向上し、今日に至っていわゆる「カナヅチ」の存在は激減した。近年においては、民営のいわゆる「スイミングスクール」の存在も無視できないが、どちらかと言えばそれは競技としての水泳(=競泳)面への貢献が目立っている。昭和57年-61年³⁾、平成5年-8年⁴⁾の大学生への調査によると、95%以上の者が泳ぎを覚えたのは「小学校期」に「学校のプール」で「教師の指導」によると回答していることから見て、近年において一般的な水泳技術の習得に中心的に貢献したのはやはり「学校」である。

このようなプールを整備した学校での徹底した水泳指導の普及以前は、川・海等の自然の場で、家族や地域の人々による水泳指導がなされていたことは想像に難くない。そのような個人的・個別的な水泳技術の習得の時代から考えれば、学校による国民的レベルでの泳力向上への貢献は大いに認められなければならないであろう。

しかしながら、子どもと泳力との関係を、先に述べたような「遊び」としての原点に立ち返って考える時、さらにそのことを今後の生涯スポーツ時代における水辺スポーツとの関係において考える時、これまでの「学校プールでの教師の指導」のみで果たして十分であるのかという疑問が生じる。

学校での水泳指導は、時間制約などの諸条件によってあくまでも水泳技術の基礎基本に限られ、しかもプールという安全管理の行き届いた場内でのものであり、川や海など生きた自然に適応する泳力とはかなりのギャップがあると考えられる。実際、小・中学校のプールのほとんどが25mプールであり、そこでの泳ぎに慣れているため長い距離が泳げなかったり、「プールで泳げても海で泳げない」⁵⁾子どもの存在は確かにあるのである。いつ

*兵庫教育大学学校教育学部附属実技教育研究指導センター(体育教育分野)

**兵庫教育大学 第5部(生活・健康系教育講座)

の間にか、泳力の指導・向上は、学校のプールで教師によってのみ担われるべきものであるという固定観念が定着しているのではないだろうか。特に小学校期の「水」に関わる諸能力の向上について、人的側面（教師・親・地域の人々など）と場的側面（プール・川・海など）の各要因を影響を総合的に把握し、再検討する時期が来ているように思われる。

本研究は、以上のような研究動機にもとづいて、現代大学生の泳力と、彼らの小学校期の水辺遊びとの関係について調査による基礎的資料を得ようとするものである。

2. 調査結果

2-1. 泳力の測定

本学では、昭和58年以降、実技教育研究指導センターにおいて、学部学生の実技向上の目安として水泳をはじめとする各運動領域の技能レベル「グレード」を設定している。水泳についての基準は、以下に示す内容である。

(水泳) (上段：男子、下段：女子)

種目	グレード	E	D	C	B	A
自由型 50m	男子	55"	50"	45"	40"	35"
	女子	1' 05"	1' 00"	55"	50"	45"
平泳 100m	男子	2' 50"	2' 35"	2' 20"	2' 05"	1' 50"
	女子	3' 00"	2' 45"	2' 30"	2' 15"	2' 00"
背泳 50m	男子	1' 05"	1' 00"	55"	50"	45"
	女子	1' 15"	1' 10"	1' 05"	1' 00"	55"

そして平成6-8年度の1年次生でグレードC以上の合格者（クロール、平泳、背泳の3種目、男女混合）は結果は以下のようであった。

	クロール(名)	平泳(名)	背泳(名)
平成6年度	169	105	102
7年度	171	94	103
8年度	190	130	136

2-2. 小学校期における水辺遊びの調査

平成8年11月に平成6-8年度入学の本学学部生を対象として、川および海で彼らが小学校期にどの程度遊んだか、またその時の同伴者は誰であったかに関する調査を実施した。グレードテストとの関連が明確である有効回答者数は130名であった。結果を表1・2に示した。

昭和57-61年において上越教育大学学部生を対象とした行われた調査³⁾では、児童期に泳ぐことが可能な海等の自然の場を約8割の学生が有しており、その約8割がそこでの遊泳を経験したと報告されている。本調査にお

表1. 水辺（川・海）での遊び量（N=130）

	川	海
十分遊んだ・・・	30.0%	32.6%
時々遊んだ・・・	42.3%	42.6%
少し遊んだ・・・	23.1%	20.9%
遊んでない・・・	4.6%	3.9%

いても7割以上の者が川・海で十分あるいは時々遊んだとしており、そのような場で遊んだ経験がないとするものは極めて少なかった。自然環境の悪化に伴い、子どもの自然遊びの減少が叫ばれて久しいが、多くの者にとって遊ぶことが可能な水辺の場があり、かつそこでの遊びを経験していることとなる。

また、水辺での遊びには多少なりとも危険が伴うために、同伴者の存在は欠かせない。同伴者についての選択率を見てみると、川と海では若干異なっているが、双方において親・兄弟姉妹などの家族が重要な役割を果たしていることがうかがえるが、海ではそのことがより顕著な結果となっている。やはり川よりも海の方が危険度が高いために、監視者としての「大人」の存在が欠かせないということであろう。しかし、家族以外の「地域の人」「親戚」の同伴率は川・海とも高いとは言えず、「教師」に至ってはほとんど関与していない。

表2. 同伴者について（N=130 複数回答）

川		海	
1. 同学年の友人	54.5%	1. 父親	76.5%
2. 兄弟姉妹	53.8%	2. 母親	73.5%
3. 父親	40.5%	3. 兄弟姉妹	71.7%
4. 母親	28.4%	4. 同学年の友人	49.0%
5. 年上の友人	27.9%	5. 親戚	24.2%
6. 年下の友人	26.6%	6. 年上の友人	17.4%
7. 親戚	15.5%	7. 年下の友人	15.8%
8. 地域の人	5.9%	8. 地域の人	13.5%
9. 祖父	5.2%	9. 祖母	5.6%
10. 祖母	5.2%	10. 祖父	5.4%
11. 教師	2.3%	11. 教師	1.5%

さて、小学校期の水辺での遊びが「水」に対する興味関心を増長させ、その後の泳力の向上に対する動機となっているのかどうかを検討するのが本稿の主たるねらいである。

なお、本学のグレードテストは大学1年次生の時点での測定であり、小学校期との関係を考慮する際に、中・高等学校での水辺活動の程度が当然考慮されなければならない

いが、その点については本調査で別途把握し、中・高等学校において水辺遊びや水辺スポーツを熱心に行ったとする者（ごく少数、約5%）は除いた。兵庫教育大学学部生を対象とした平成6-8年の調査⁶⁾を見ても、ほとんどの対象者（99%以上）が小学校期に泳ぎ始めたとしているため、やはり初期体験としての小学校期の水辺遊びとの関係が重要視されるのである。

次の表3・4は、水辺遊びの調査結果と、先に挙げたグレードテスト結果とをクロス集計した結果である。各種目（クロール・平泳ぎ・背泳）のうち最も高いグレードを個人の泳力として捉え、グレードA・Bを高泳力グループ、グレードC以下を低泳力グループとした。また遊び量は「十分よく遊んだ」「時々遊んだ」とする者を「遊んだグループ」、 「少し遊んだことがある」「遊んでいない」とする者を「遊んでないグループ」とした。

表3. 川での遊び

	遊んでない(名)	遊んだ(名)
低泳力グループ	17	46
高泳力グループ	19	48

・泳力グループ間で有意差なし（ X^2 値=0.03）

表4. 海での遊び

	遊んでない(名)	遊んだ(名)
低泳力グループ	12	51
高泳力グループ	20	46

・泳力グループ間で有意差なし（ X^2 値=2.19）

この結果から、大学生の泳力と小学校期の水辺遊びの量についての関係は見出せないものとなった。すなわち、対象者である大学生の泳力はあくまでプールにおいて養われたものであり、水辺遊びの量とは無関係の次元にあることが示唆される。

そこでさらに、対象者の泳力と自然との親しみの度合を確かめるために、「自然認識尺度」を高泳力グループおよび低泳力グループに適用した（表6）。

この尺度は、野外活動経験における自然認識を測るために、大学生1,000人以上のサンプルから構造化と尺度化がなされたものである（質問内容を表5に示す）⁶⁾。なお、この尺度の5段階評価による判定基準に照らすと⁷⁾、本調査の対象者は両グループともに第3レベル（平均値幅：3.4~4.3）、つまり中間レベルとなる。

そして、両グループ間の平均値の差の検定を行った結果、有意な差は認められなかった（ T 値=0.9）。つまり、泳力は「水」という自然に対応するものであるにもかかわらず、対象者の泳力の高低は、自然認識（自然への気づきや一体感）とは無関係であるということになる。

以上のような結果を踏まえると、プールにおいて示された泳力は、例え高泳力グループであっても、小学校期の水辺遊びによって啓発された動機によるものではなく

表5. 野外活動経験に関する「自然認識尺度」項目内容

質問項目	
自然認識	1. 人間にとって自然との触れ合いは不可欠であると考えたことがある
	2. 自然の変化を見て季節を感じたことがある
	3. 人間は自然がないと生きていけないとあらためて感じたことがある
	4. 人間にとってキレイな空気は不可欠だとあらためて思ったことがある
	5. 自然を大切にすることは本当に重要なことだと感じたことがある
自然への気づき	6. 生き物が協力し合って生きていると知ったことがある
	7. 普段あまり見ない生き物を発見して感動したことがある
	8. 同じ種類の生き物でもよく見るとひとつひとつに違いがあるのに気づいたことがある
	9. 生き物の暮らしぶりを観察して感動したことがある
自然との一体化	10. 同じ生き物の鳴き声にもいろんな鳴き方があるのに気づいたことがある
	11. 自然にとけこんだ（一体になった）という快感を感じたことがある
	12. 自然の中で音を聞いて自然が生きていると感じたことがある
	13. 川・海・湖などで泳いで母親に抱かれる子どものような気分だと思ったことがある
	14. あらためて草木のざわめきに関心したことがある
15. 自然の中の音を聞いて感じられない自然のエネルギーを感じたことがある	

表6. 泳力グループと自然認識尺度値

低泳力グループ(N=63)		T値	高泳力グループ(N=66)	
平均	標準偏差		平均	標準偏差
3.9	0.59	0.9	3.8	0.66

純粹にプールでのみ養われた泳力であり、また低泳力グループについては、仮に水辺遊びをよく行ったとしても泳力の向上にむすびについてはいないという傾向が示唆される。

3. 結語～若干の問題提起

高度経済成長の結果として余暇時間の増大という現実があり、その余暇をどう充実して過ごすかという課題に直面している。特に日本にあっては、あまりにも経済中心主義であったために自然破壊や公害問題を引き起こしたという反省から、自然環境への国家的関心が高まっている。ミクロ的レベルではあるが、家族等で行うアウトドアブームが流行しているのはそのような背景にもとづいたものである。冒頭でも触れたように、水辺遊びや水辺スポーツの隆盛もその路線のなかにあると見られる。そしてまた、教育においても、学校週5日制の提案に見るように、これまでの学校中心の体制から家族・地域との連携による教育へと方向転換を図ろうとしている。このような状況のなかで、水に対する適応力を高めるのに重要な小学校期において、学校外での活動の在り方が今後ますます大切なものとなってくる。今回の調査結果は、仮に遊ぶ場と親等の大人の同伴者が在ったとしても、実際に「水」と戯れることへの動機を高めたり、技術を高めたりする遊び方が行われていないことを示唆している。

プールは安全な場であるし、水泳技術の基礎基本を学ぶために必要であることは言うまでもない。正しい指導に従えば洗練されたフォームによる効率よい泳ぎ方が身に付くのは事実である。しかしプールで養われる泳力は非常に「線の細い」ものである。「水」という自然への適応力を高めるという本来の目的を全うするためには、プールだけでは事足りず、やはり川や海という自然の場での「鍛え」が不可欠であるように思う。

「アブナイ、アブナイ」と唱えるだけで、子どもに対して積極的な働きかけのない単なる監視者としての「大人」が一般的なのではないだろうか。学校はさらに「野外活動」を積極的にカリキュラムに取り入れ実施すべきであることはもちろんであるが、親を中心とする大人の子どもへの関わり方も重要であろう。水遊びの原点に戻って欲求充足を促し、「水」という自然との戯れを通して自然に対する適応力と感性を高めることが、学校内外を問わず今後の体育的課題として求められよう。

なお、本調査は、例数も少ない事例的なものであり、一般的レベルでの結論を導き出すには至らないが、今回得られた知見を今後の体育実技指導に活かすことができれば幸いと考える次第である。

- 1) 余暇開発センター, 「レジャー白書'96」, 1996.
- 2) 嘉納治五郎, 「柔道」, Vol.3-No.8, 1916.
- 3) 木庭修一・永木耕介・榊原潔・直原幹・香川明夫, 「水泳能力に及ぼす環境的要因(場所および指導者の存在)に関する研究」, 上越教育大学研究紀要Vol.6, 1986.
- 4) 寺岡敏郎・永木耕介, 「水泳に関する調査資料」, 未発表, 兵庫教育大学実技教育研究指導センター, 1993-96.
- 5) 野村武男, 「水泳の授業を見直そう」, 体育科教育Vol.33-No.6, p.20, 大修館書店, 1985.
- 6) 永木耕介・高田俊也・千駄忠至・寺岡敏郎・松永晃, 「野外活動における自然認識についての因子分析的な研究」, 兵庫教育大学実技教育研究Vol.9, pp.89-96, 1995.
- 7) 松永晃, 「野外活動における自然認識の深まりに関する研究」, 兵庫教育大学大学院学校教育研究科 生活・健康系コース 修士論文, p.30, 1995.

A study of the correlation between Swimming Ability and Aquatic Play during Childhood

—A survey of the students of the Hyogo University of Teacher Education—

Kosuke NAGAKI, Toshio TERAOKA, Toshiya TAKADA, Yasuhiro HONDA, Hiroyuki MORITA,
Tadashi YAMAMOTO, Kenji MATSUSHITA, Tadashi SENDA

Abstract

We have been examining the swimming abilities of students since 1983.

In Japan, the number of swimming pools in schools has been increasing since the 1960's, and the swimming abilities of children have remained constant in the swimming pool. But it was wondered how total swimming ability in a natural environment (e.g. in the river or sea) leveled up.

Aquatic sports have been getting more popular along with the civilization of modern society, but it is a fact that many accidents caused in aquatic sports are due to a lack of swimming ability.

As some research indicated, it was clear that almost all people start to swim when they were children. We conducted a survey of University students about the quantity of aquatic play in their childhood, and how it influenced their swimming abilities.

In the results, it was clarified that there was no correlation between swimming abilities and quantity of aquatic play in childhood. This result indicated that aquatic play did not motivate and improve their swimming abilities.

It was considered that if adults (not only teachers but also parents or neighbors) as significant others paid more attention to aquatic play during childhood, total swimming ability would be developed and improved.